ボクは
カノジョの
モノ
天戸祐輝
表紙イラスト：鈴音れな
試し読み版
二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ボクはカノジョのモノ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

ボクは カノジョのモノ

天戸祐輝
表紙／鈴音れな

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

琴沢(ことさわ) 歩斗(ふと)

両親が共働きのため幼い頃から隣にすむ一つ年上の音麗ということが多く、いつの間にか彼女を意識し始めていた。最近は「音麗に恋人がいる」という噂にハラハラしている。

葉姫羽(はきはね) 音麗(ねれい)

歩斗の隣に住む美少女。優しくも自由奔放な性格で、学園では男女問わず人気がある。歩斗以外には隠しているが、趣味は格闘技で、よく歩斗を実験台に技の研究をする。

少し寒くなった秋空の中。赤紫を基調とした学園の制服に身を包んだ、平凡を絵に描いたような少年が、トボトボと琴沢と表札の掛かった家の鍵を開け、ドアを開けて入っていく。

「はぁ～～～～……たく、今日も一日中引っ張りまわしやがって……」

玄関で靴を脱ぎ捨てながら、思いっきり溜め息を吐く。

学園で一番人気のある女先輩に、休み時間になる度に連れまわされた一日を思い返すだけでも、体力が底をついてしまいそうだ。

しかも、放課後になってからは、柔道部の見学までつきあわされたお陰で、彼女に恰好いいところを見せたい柔道部の奴らに投げ飛ばされ、身体中のあちこちが痛い。

「まったく、いつものこととはいえ、なんであんな性格なんだか……」

「あっ、おかえり～～歩斗。買い置きしてあったジュースとポテチ、勝手にもらってるからね～～～っ」

ドタッ！

脚を引きずるように玄関からリビングに入った途端、いきなり自分の名前を呼びながらソファーでくつろいでいる、十代後半の少女の姿に、頭から床に突っ込むように倒れてしまった。

「あれぇ？　どうしたの、そんなに疲れた顔して。寝るのなら、自分の部屋のベッドで寝ないと風邪ひいちゃうわよ」

幼さを残しながらもシャープな輪郭の小顔をこちらに向け、大きくて猫のようなアーモンド型の黒い瞳で彼を見つめてくる少女。

見間違えるはずもない。彼を休み時間になる度に引っ張りまわした、男女問わず学園で一番人気の女先輩だ。

しかも、床にぶっ倒れたままでいる少年を心配する振りをしながらも、桜色の小さな唇でパリポリとポテチを食い続けていやがる。

「なんで俺んちにいるんだよ……」

「だって……、家に帰るのメンドウだったんだもん。ポテチの買い置きもなかったし」

「なかったし。っておまえ……うわぁっ!?」

起き上がろうと床に手を着き、顔を上げた途端。目に映ってきた彼女の姿に驚いてしまった。

ソファーでくつろぎながらパリポリとポテチを食べていた彼女が、自分を心配して目の前に立っていたのだ。

「ちょっ、音麗……、そんなところに立ったら……」

「ん？　どうしたの」

整った美貌を下に向けている彼女の名前を呼びながら、そのあとの言葉に詰まってしまう。

一つ年上の彼女とは幼馴染みで、そのキュートな美貌にも見慣れている歩斗だが、今の状態はさすがに焦る。

今の彼女は学園の制服から、胸元の開いたピンクのTシャツに紺のジャケット、そして黒いタイトミニのスカート姿でいるのだ。

しかも彼女の身体は、少しの厚着では隠せないほど、細くてスタイルのいい肢体をしている。

Tシャツ越しでも、お椀型に膨らんだDカップの柔房が分かり、腰は学園のどんな女子よりも細くくびれている。タイトミニで包まれたお尻は魅力的な逆ハート型に膨らみ、両脚は理想的な長さと細さで素足を晒して、ムチムチとした太腿が部屋の明かりを艶めかしく反射させている。

学園中の誰もが憧れるに相応しい美少女だと、改めて思ってしまう姿だ。

「もう、どうしたのよ。黙ってわたしを見つめちゃってっ」

「うわ、それ以上近づいたら……」

黙って見上げていた歩斗に、少し照れた彼女が一歩脚を踏み出してきた瞬間。彼の目には瑞々しい太腿の付け根と、水色のスポーツタイプショーツが映ってきた。

しかも、その下着には女肉の膨らみと縦皺。大きな桃の形まで浮き出している。

（たくっ、俺を男だと思ってないのかよっ）

無邪気にも感じる幼馴染みのショーツを見てしまった歩斗は、慌てて床から起き上がって彼女から顔を背けてしまう。

音麗の下着は度々見てしまうが、さすがに真下からスカートの中を覗くように見てしまうと、高鳴る鼓動を抑えることができない。

顔は熱くなり、自分でも真っ赤になっているのが分かるほどだ。

「起きられるなら、早く起きなさいよ。頭から床に突っ込んだから、少し心配しちゃったじゃない」

もうっ、とばかりに少し頬を膨らました彼女が、再びソファーに座り。というか、寝転がって勝手にテレビとＤＶＤの電源を入れて見始めた。まるで、自分の家のように。

「おい……」

「なぁに？」

赤くなった顔を冷ましながら話しかけたが、彼女はリモコンを持ったまま振り向こうともしない。

「だから、なんで俺の家に居るんだって訊いてるんだけど」

「さっきも言ったでしょ、わたしんちに戻るのがメンドウだったって。それに、わたしが歩斗に家に居るのはいつものことじゃない」

意味が分からない。家に帰るのがメンドウだったという理由は成り立たない。なにせ彼

女の家は隣。歩いて十秒と掛からない距離だ。
いくらこの家に彼女の着替えが置いてあるからといって、その理由には無理がある。
「いい加減、周りの目を気にしろよ……」
呆れながら口にしてしまう。
確かに彼女は、昔から彼の家によく居る。
というのも、歩斗の家は両親が共働きで帰りが遅く、音麗の両親は音楽家で世界中を飛び回っているため、両親が必ず帰ってくる彼の家に居るほうが安全という理由からだ。
が、互いに成長した状態にもなって一つの家に居るのは、多少他人の目が気になってしまう。
「いいじゃない。昔は一緒にお風呂にも入ってた仲なんだし。今さら恥ずかしがることなんて……」
「そういうことを言ってるんじゃなくて、俺はだな……」
『おお～～っと出た、デブエレブル選手。デビューしたばかりの相手に対し、二百キロの巨体を使ってのフライングボディスラム！　さすがにこれで終わりかっ！』
「きゃああっ。すごいスゴイすごいいいいっ！　ねねね、今の見たっ、あんな巨体でのフライングボディよっ、一瞬リングがたわんで見えたわっ！」
歩斗の言葉を聞くこともなく、いきなり話を中断した音麗が、ＤＶＤのプロレスを見な

初めての肉果実の感触に興奮した歩斗は、指に力を込めて柔房を揉みまくり、何度も美乳の形を歪ませてしまう。

「んっ……もう少し優しく……あくっ……い、痛いよ……」

（こんなに形が変わるなんて、それに乳首がこんなに……）

眉間に皺を寄せ、拒絶するような声になった彼女に気づかないまま、両手で双美乳をめちゃくちゃに揉み、小指の先ほどに尖った乳芽に興奮を高めていく。

自分の手で淫らに形を歪ませる胸から、もう目が離せなくなってしまい、自然と口を薄ピンクの頂に近づけてしまう。

カプッ……。

「痛ぅううううう――――――っ！」

胸を揉みながら小さな頂に口を寄せ、限界まで尖った乳芽に歯を立てた瞬間。彼女の唇から痛みの声が奏でられた。

「えっ……」

苦痛の声に、思わず乳首から口を離して幼馴染みの顔を見た歩斗は、そこで初めて自分勝手な愛撫をしてしまったことに気づいた。

胸を乱暴に揉み、噛むように乳芽に歯を立ててしまったため、彼女は感じることもできずに、目尻に涙を溜めていたのだ。

えっちシーン試し読み ここからスタート！

「ご、ごめん……」
「っ……はぁはぁはぁ……」
痛みに呼吸を荒らげたキュートな美貌に、興奮していた気分が吹き飛んでいく。
「うっ……ひどい……よぉ……はぁはぁはぁ……」
その言葉に、両手を動かすことすらできなくなってしまう。
初めてとはいえ、興奮しすぎた。こんなに乱暴に揉んでしまったのだ、これ以上続けるわけにはいかない。
「もうっ……。もう少し優しく揉んでよ……」
しかし、彼女はそんなこと気にしていないよう瞳を潤ませ、さわったままの掌に柔房を押しつけてきた。
「こ、今度は気持ちよくしてみせるから」
「……うん」
破裂してしまいそうな心臓の鼓動を抑えながら、下から掬うように双美乳を包み、少し力を込めて二つの肉果実を揉んでみる。
「んんっ……」
ふにゅっ。と音が聞こえそうな柔らかさで二つの膨らみが楕円に歪んだ瞬間。彼女の唇から艶めかしい吐息が聞こえてきた。

また痛いのかと幼馴染みの美貌を見てみれば、長いまつげをフルフルと震わせながら、唇を噛み締めている。

「音麗？」

大丈夫か気になって声を掛ける。しかし、恥ずかしげに美貌を昂揚させたまま、答えてはくれない。

（大丈夫……だよな）

自信なさげに、もう一度柔房を揉んでみる。

「んぁあっ……んっ……」

音麗が肢体を小刻みに震わせて、堪えきれない声を洩らしてきた。

（俺の手で感じてるっ）

自分の手で彼女が感じているのが嬉しくなり、円を描くように二つの肉果実を揉みまくってしまう。彼女の胸は、白い肌を薄く染めながらうっすらと汗ばみ、なにかを求めるように薄ピンクの頂が震え始めた。

「はふっ……んん……こんなに……んっ……胸だけなのに……はぁはぁはぁ……」

彼女の唇から濡れた吐息が何度も聞こえ、もう訊かなくても感じているのが分かる。

胸を揉む掌からは、音麗の心臓の鼓動が何度も伝わり。興奮に我慢できなくなった肢体が、ゆっくりとくねり始めた。

「んぁ……やっ……声……恥ずかしいよぉ……歩斗……」
呼吸を乱しながら、自分の甘い声に恥ずかしがり始めた彼女の姿に、もう一度乳芽を舐めようと顔を柔房へと近づけ、グミのような感触の頂を口に含んで舌を這わせた途端。
「んふぅぅぅぅぅぅっ！」
幼馴染みが甲高い声で喘ぎ、我慢できなくなったように頭を抱えてきた。
「歩斗……歩斗ぉ……」
何度も名前を呼んでくる彼女に頭を抱えられながら、顔を柔房に埋めさせられていく。
「気持ちいい？」
温かな乳肌に顔を埋めながら訊いてみれば、彼女は何度もうなずいて応えてくる。
こんなに感じてくれている幼馴染みの姿に、歩斗の興奮も高まっていく。
胸を揉む手は、再び荒々しくなって柔房の形を歪ませ、顔を乳肌に擦りつけるようにして、薄ピンクの頂に軽く歯を立てて吸いまくってしまう。
「んぅぅぅっ！　ひゃふっ……はぁはぁ……ひゃんっ！　いい……んぅ……こんなに胸が切ないのに……いいよぉ……」
荒々しい行為なのに、先ほどと違って音麗が切なそうな声で悶え始めた。
繰り返される熱い吐息に、揉んでいるにもかかわらず彼女の双美乳は大きく上下し、肢体から力を抜いて、抱えていた彼の頭から腕を離していく。

亀頭が薄い処女膜を突き破った感触と同時に、音麗が一滴の涙を零して唇を離し、嬌声を張りあげながら抱きついてきた。

張りのある二つの膨らみは、二人の身体の間で平べったくなるほど潰れ、肉果実の柔らかさと乳首のコリコリとした感触が伝わってくる。

「くおおっ！　すご……こんなに……くっ！」

しかし、歩斗には抱きついてきた胸の感触など、ささいな気持ちよさでしかなかった。処女を突き破った時の勢いが強すぎ、一気にペニスの根元まで膣内に挿入してしまったのだ。

亀頭には少し硬いゴム輪のような子宮口が当たり、エラ裏や肉幹のすべてに、ウネウネとした膣襞が絡まってくる。

ペニスは強烈なムズ痒さに包まれてしまい、射精を堪えるだけで精一杯になってしまった。

「あうッ……あッ……はぁはぁ……。ど、どうしたの歩斗……んぅ……動いても……平気……だよ……」

ペニスを根元まで挿入したまま動けなくなってしまった彼に、音麗が処女を失った痛みを我慢しながら、優しい笑みで囁いてきた。

「あ、ああ……」

ちシーン）
試し読み
ここから！
スタート！

挿入したばかりなのに、射精しそうで動けない、とは言えない。
歩斗は歯を噛み締めながら腰を動かし、狭い膣内でペニスをピストンさせ始めた。
ジュプジュプジュプ……。
「んッ、んぅうぅうぅうッ！」
「くおおおっ！」
秘孔を捲り返し、半分までペニスを引き抜いただけで、絡まってくる膣襞に擦られた肉幹が震え、内部に濁液が登りそうになってしまった。
尿意にも似た鋭い疼きに、ペニスは根元から引き攣り始め、敏感になった亀頭からカウパー液が溢れて、彼女の膣襞にトロリと垂れてしまう。
「あくッ……はぁはぁ……いいよ歩斗……我慢……しなくても……。いいから……、中に出しても……いいから……、ううッ……気持ちよくなって……」
幼馴染みである彼女に、隠し事なんてできない。
必死に射精を我慢していたことに気づいた音麗が、優しげに囁きながら細腰を動かしてきた。
挿入して少し動かなかったことが幸いしたらしく、処女を失った傷みは薄れ、苦しそうだった声に濡れた吐息が混ざり始めている。
「好きだ……、好きだ音麗っ！」

「んぁああッ！　はふッ……んふッ……あッ……ひゃんんンッ！」
ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ！
二度目の告白とともに、彼女に射精を許された腰が、激しく動き始めてしまった。
彼女の唇からは濡れた喘ぎが洩れ始め、腰が淫部にぶつかる音とともに、二人しか居ないリビングに響き渡っていく。
「はふッ、んン……お腹の中……歩斗でいっぱいに……あふッ、わたし……わたしッ……」
「音麗の中、急に……くううっ！」
ソファーの上で仰向けになった彼女が全身をくねらせ、セミロングの黒髪を乱しながら肌を震わせ始めた途端。挿入に慣れ始めた膣内の動きが急に変化してきた。
硬かった膣壁が柔らかく肉幹を包み、幾枚もの膣襞がペニス全体を舐め溶かすように絡みついて、付着した膣粒でエラ裏まで擦って奥へと導きだしたのだ。
膣は全体が大きくうねり、子宮口が何度も亀頭にキスをするように吸いついて、射精させようと尿道の中までくすぐってくる。
秘孔はヒクヒクとする蠢きを早め、淫らな水音を鳴らしながら、肉幹との隙間から愛液を吹き出し始めた。
「すごい……すごいよ音麗っ。俺もう出ちゃいそうだっ！」
「はふッ、んッ、う……嬉しい……ひゃううッ！　わたしも……わたしもいいのッ……歩

斗がお腹の中で動いて……あんッ！　出して……出してぇえぇッ！」
下から抱きついていた音麗が、歓喜の声で射精を求めてきた。初めてのセックスなのに肢体が感じすぎて、自分の感覚をコントロールできなくなったようだ。
しかし、それは歩斗も同じだった。
挿入した時から、膣内が与えてくれる想像以上の快楽が強すぎ、もう彼女の秘孔を突き上げることしか考えられなくなっている。
すでにペニスは、ムズ痒い疼きを超えて痛みさえ感じ始め、腰を動かす度に亀頭に吸いついてくる子宮口の感覚に、肉幹全体がピクピクと引き攣ってしまう。
「ふぁンッ！　あッ、あッ、あッ……はくぅうッ！　早く……早く歩斗ぉ……あうッ！　わたしもう……もうッ！」
音麗の声が高くなり、抱きついていた両腕を首から離して、胸を激しく揺らしながら悶え始めた。
セミロングの髪は、左右に振られる美貌に合わせてなびき、胸の谷間には玉のような発情の汗が幾つも流れて、捲れたスカートのウエスト部に染み込んでいく。
前を開いた白いブラウスは、染み込んだ汗で透けてしまい、隠すべき肌を見せている美少女を、より淫らに彩っている。
（くおっ。本当にもう、もうダメだっ！）

膣が与えてくれる快楽。そして淫らに悶える彼女の姿に、さすがに射精感を抑えるのが限界に達してしまった。

どんなに彼女を突き上げていたいと思っても、ペニスはビクビクと震えながら内部に濁液を駆け登らせ、射精直前の焦燥感が股間から全身に広がってくる。

ジュプッ！　ジュプッ！　ジュプッジュプッ！

「ンぁああッ！　はげッ……激しくなッ……あッあッあッ！　ひゃんンッ！」

「音麗……音麗っ！」

意味もなく彼女の名前を繰り返しながら、腰を激しく使って何度も秘孔を突き上げてしまう。

耳にはもう喘ぐ音麗の嬌声しか聞こえなくなり、内部に濁液を登らせていくペニスが激しく脈動し、亀頭が痛みまで感じながら膨らんでいく。

「いくよっ、いくよ音麗っ！　音麗の中にいっぱい……くぉおっ！」

「くぅんんンッ！　はうッ……い、いいよッ……ンあッ……歩斗の……わたしを歩斗のでいっぱいに……はぁはぁ……いっぱいに……ッ!?」

びゅるるッ！　びゅぷッ……びゅぷびゅるびゅるびゅるびゅるるるるるッ！

「ひャンんンんンッ！　出てる……歩斗のがわたしの中に……熱ッ！　歩斗……歩斗ぉおぉおぉおぉおおお――――ッ！　ッッ!!」

ピシュッ！　ピシュッピシュッ！

淫部にお腹を叩きつけ、思いっきり秘孔を貫いて子宮口を突き上げた瞬間。とめる間もなくペニスが脈動して、痛痒さをともなう激しい放出感とともに、幼馴染み美少女の膣内に精液を飛び散らしてしまった。

同時に、彼女も初めて受けた白濁液に肢体を仰け反らせ、肌を震わせながら絶頂に達している。

（くうっ……出る……音麗の中にまだ……っ！）

「ンううッ！　あふッ……ッッ……ンぁあぁあぁあぁあ――――――――ッッッ！」

自分のすべてが精液になって彼女の中に入っていくような錯覚を感じながら、何度も腰を動かして射精を繰り返す。

自分の体液が彼女の中で跳ね、うねる膣壁と襞に絡まりながら子宮に送り込まれていく度に、音麗が瞳を閉じたまま快楽の声で喘ぎ、肢体を痙攣させながら、長いまつげをピクピクと震わせている。

上を向いても形の崩れないお椀型の肉果実は、ビクッ、ビクッ、と痙攣する肢体に合わせて、プリンのように柔らかく揺れて弾けそうな薄ピンクの乳芽を小刻みに震わせ、視覚的にも絶頂したことを告げてくる。

スカートが捲れて露わになった淫部は、秘孔と肉幹の隙間から断続的に愛液を吹き出し、

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/